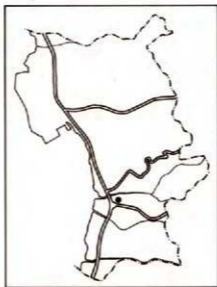


北谷城第7遺跡

—瑞慶覧幹線移設工事に係る発掘調査—



1985年3月

沖縄県 北谷町教育委員会

はじめに

本書は北谷町大村城原に所在する北谷城遺跡群のひとつである第7遺跡の発掘調査の成果をまとめたものであります。

北谷城周辺部はこれまでの調査の結果、数ヶ所の遺跡が点存し、複合遺跡であることが明らかになり、歴史の学習の場としてこのうえもない貴重な地域であり、また、町の顔として歴史公園の構想も進めているところであります。

昭和56年以来、瑞慶覧幹線移設工事があり、城の丘陵上部に予定していた計画を沖縄電力株式会社の御理解によりまして、丘陵下に移動することができた経緯があります。ところが、城の周辺部は米軍基地になっていまして、城よりある一定の距離をおくことができず、今回の緊急発掘調査のはこびとなったしだいです。

第7遺跡は北谷城の丘陵部から投棄されて堆積した貝層であることが、城内出土の遺物と類以していることから明らかになりました。また、叩目のある土器とこれまで呼ばれていました酸化焼成の須恵器である中世陶器を検出し、県内でこれまで2遺跡でしか確認されていない貴重な資料や山羊の骨片が層中から出土しました。これらの資料は今後のグスク研究をする上で、一つの示唆をあたえるものであると聞きおよんでいます。

小冊紙であります但し本書が広く活用され、文化財保護の一助ともなれば幸いです。なお、調査に際し御指導御協力や現場視察までおこなっていただきました県教育庁文化課課長をはじめ諸先生方、玉稿を賜りました川島由次先生に末尾ながら厚くお礼を申し上げます。

北谷町教育委員会

教育長 真栄城 兼 徳

例 言

1. 本報告書は昭和59年度、「キャンプ瑞慶覧における瑞慶覧幹線移設工事に係る文化財の調査業務」として沖縄電力株式会社と受託契約をしたものをまとめたものである。
1. 獣骨の執筆については、琉球大学農学部家畜解剖学、生理学教室の川島由次・上田博之・高橋陽子先生方の玉稿をいただいた。
1. 出土した中世陶器については熊本大学文学部考古学研究室の白木原和美教授と熊本県教育庁文化課専門員の野田拓治氏の貴重な所見をいただいた。
1. 石質の所見は沖縄県立教育センターの大城逸郎先生にいただいた。
1. 遺物の実測・トレースは新里齊・国吉喜盛・亀川盛勝・照屋孝・古堅勝美による。
1. 執筆、編纂は主に中村恵がたった。
1. 出土した資料については、北谷町教育委員会に保管してある。

本文目次

はじめに	
一 遺跡の位置と環境	1
二 調査の概要	6
1. 調査に至る経過	6
2. 調査組織	6
3. 発掘の経過	6
三 調査の内容	7
1. 層序	7
2. 出土遺物	11
土器	11
青磁	13
白磁	21
天目	24
高麗青磁	24
青花(染付)	24
中世陶器	24
類須恵器・須恵器	24
褐釉陶器	25
播鉢	25
陶器	26
鉄製品	31
銭貨	31
石器	31
貝製品	36
四 まとめ	36
付記 北谷城跡の獣骨について	38

挿 図 目 次

第1図	北谷城周辺の概要(1/7500 地図と地籍図)	2
第2図	北谷城遺跡群	4
第3図	北谷城と発掘地区(1/2000)	5
第4図	土層断面実測図(1/600)	8
第5図	土器実測図(1/2)	12
第6図	青磁碗実測図(1/2)	14
第7図	青磁碗実測図(1/2)	15
第8図	青磁碗・皿実測図(1/2)	16
第9図	青磁碗・盤実測図(1/2)	17
第10図	青磁碗・盤・白磁碗実測図(1/2)	20
第11図	天目・高麗青磁・染付・陶器実測図(1/2)	22
第12図	中世陶器・須恵器・陶器実測図(1/2)	23
第13図	陶器実測図(1/2)	27
第14図	播鉢・陶器実測図(1/2)	28
第15図	陶器実測図(1/2)	29
第16図	陶器実測図(1/2)	30
第17図	鉄製品・銭貨実測図(1/2)	32
第18図	凹石・敲石・スリ石・打ち欠き石器実測図(1/3)	33
第19図	石製品・貝製品実測図(1/2)	34

表 目 次

第1表	人工遺物一覧	10
第2表	出土具類一覧	35
第3表	ウシ出土骨一覧	39
第4表	ウマ出土骨一覧	39
第5表	イノシシ出土骨一覧	39
第6表	ヤギ出土骨一覧	39

図 版 目 次

- | | | |
|-------|--------------------|--------------------------|
| 図版 1 | 1944年(昭和19年)ごろの北谷町 | |
| 図版 2 | 上 | 北谷城遠景(東より、手前鉄塔より3番目が発掘地) |
| | 下 | 北谷城遠景(南より、中央部鉄塔よりやや右手) |
| 図版 3 | 上 | 発掘調査区(南東より) |
| | 下 | 発掘調査区(南より) |
| 図版 4 | 上 | 発掘調査区(南より) |
| | 下 | 発掘調査区(東より) |
| 図版 5 | 上 | 発掘調査状況 |
| | 下 | 発掘調査状況 |
| 図版 6 | 上 | N地区グリット内状況 |
| | 下 | N地区グリット西壁断面図 |
| 図版 7 | 上 | S地区グリット内状況 |
| | 下 | S地区グリット東壁断面図 |
| 図版 8 | 上 | S地区グリット北壁断面図 |
| | 下 | S地区グリット内遺物出土状況 |
| 図版 9 | 上 | S地区グリット西半分試掘状況 |
| | 下 | S地区グリット試掘穴土壌状況 |
| 図版 10 | 上 | 出土土器外器面 |
| | 下 | 出土土器内器面 |
| 図版 11 | 上 | 出土青磁外器面 |
| | 下 | 出土青磁内器面 |
| 図版 12 | 上 | 出土青磁内器面 |
| | 下 | 出土青磁外器面 |
| 図版 13 | 上 | 出土青磁内器面 |
| | 下 | 出土青磁外器面 |
| 図版 14 | 上 | 出土青磁外器面 |
| | 下 | 出土青磁内器面 |
| 図版 15 | 上 | 出土青磁・白磁内器面 |
| | 下 | 出土青磁・白磁外器面 |
| 図版 16 | 上 | 出土天目・高麗青磁・染付・陶器内器面 |
| | 下 | 出土天目・高麗青磁・染付・陶器外器面 |
| 図版 17 | 上 | 出土中世陶器・須恵器・陶器外器面 |
| | 下 | 出土中世陶器・須恵器・陶器内器面 |
| 図版 18 | 上 | 出土陶器内器面 |
| | 下 | 出土陶器外器面 |
| 図版 19 | 上 | 出土播鉢・陶器内器面 |
| | 下 | 出土播鉢・陶器外器面 |
| 図版 20 | 上 | 出土陶器外器面 |
| | 下 | 出土陶器内器面 |
| 図版 21 | 上 | 出土陶器内器面 |
| | 下 | 出土陶器外器面 |
| 図版 22 | 上 | 出土鉄製品・銭貨 |
| | 下 | 出土石製品・貝製品 |
| 図版 23 | 出土凹石・敲石・スリ石・打ち欠き石器 | |
| 図版 24 | 上 | 出土ウマ骨表面 |
| | 下 | 出土ウマ骨裏面 |
| 図版 25 | 上 | 出土ウシ骨表面 |
| | 下 | 出土ウシ骨裏面 |
| 図版 26 | 上 | 出土イノシシ・ヤギ骨表面 |
| | 下 | 出土イノシシ・ヤギ骨裏面 |

一 遺跡の位置と環境

今回、発掘調査の対象となった北谷町字大村城原 325 番地は、北谷城遺跡群のひとつであり、第 7 地区と紹介された地域にあたる¹¹。同地域は東西に連なる北谷城丘陵部のほぼ中央部、南斜面の下部に位置する。

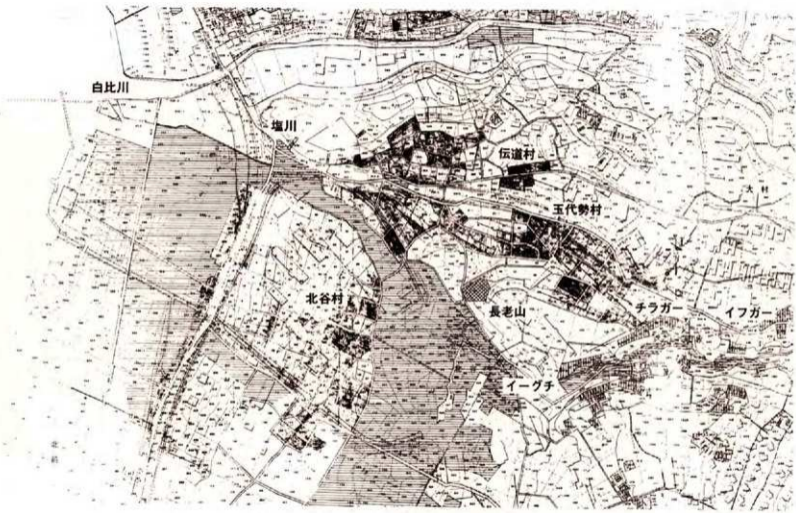
北谷城周辺部は北谷町の北に位置する砂辺地域と同じく、町内においても数少ない遺跡の集中する地域であり、加えて町内でも古い集落の形成過程の伝承を残し、古来より人々の営みを育んできた地域である。地勢によってもたらされた自然の恵みの恩恵は長期にわたる遺跡の痕跡によってもうかがわれ、生活環境に恵まれた領域であることを良く反映している。

沖縄本島をほぼ南北に走る脊梁から、西の東シナ海洋上に細長く突出した標高 50m 前後の石灰岩台地が北谷城丘陵部一帯にあたる。その西側洋上に細長くのびる丘陵の北と南の両脇には数メートルにもみたない単調な沖積低地をひかえていることから、丘陵部が際立って高く見える。

北谷城からの遠望は良く、北は沖縄本島の地質を二分する砂辺～宇堅地質構造線の様相を示すピュト状の琉球石灰岩の突起部が連峰し、その後方には北部の山々と読谷村の最高峰にあたる座喜味城から残波岬を望むことができる。南に向きを返ると東側から中城城、浦添城、首里城、伊祖城などの峰々を追うことができ、西洋上には慶良間諸島や渡名喜島の島々が指呼の間にあり、景勝の地にある。

北谷城一帯の石灰岩丘陵部は北谷城の北側を西流する白比川により二分され、長年の浸食を受け、両側には数十メートルの河岸段丘の発達がみられる。特に河口に近い南側の北谷城側は河幅も広く、崖面も険しい。川向こうの細長い丘陵部も同様に険しく、「池城¹²」と呼ばれ、1609 年南下する薩軍の城の北の盾として活用された伝承や、¹³古く古琉球期の攻防戦などから、同地域が北谷城と同様に要害の地の利を保持していたことは理解にたやすい。

北谷城の南にひろがる字北谷の旧村落の形成をみると、城の基部から南東にかけては南西方向の緩斜面の洪積世台地が南の宜野湾市まで広がる。この台地斜面には西流する数ヶ所の湧水がみられ、小谷を形成する。最も北谷よりの湧水であるイフガーは下流のチラガーと合流し、台地斜面の入口にあたるイーグチで低湿地帯となる。この一帯を苗田（ナーダ）と称し、区画の細い良田となっている。いわゆる北谷ターブックワの根幹をなす地域で、現国道 58 号線添いの砂地一帯との間には城の南西側を掠めるかたちで迂回し、白比川に合流する所まで後背湿地をもつ。白比川と合流する水田地域は近年まで川舟が出入りしたとの伝承があり地籍図に塩川という地名をとどめていることから、水道の役割を保持していたも



第1図 北谷城周辺の概要 (1/7500 地図と地積図)

のと思われる。

この小谷と低湿地で区画された台地は古い村落が形成された地域で、伝道村、玉代勢村の2つの村落から始まる。前者の伝道村の古名は前城島（その後真栄城に変わる）といわれ、『琉球国由来記』にみられる北谷城城内殿の代々の祭司者であるノロの居住も同村落内にあり、城との関わりを暗示している。砂地にひろがる北谷村は北谷番所地や馬場跡をもち、本村の様相をなすが、前述の伝道・玉代勢村から派生した村と伝えられている。

北谷城周辺部には下記の遺跡の存在が知られている。¹¹⁵重ねて記載する。

No.1 金満按司墓と称される墓で、北に開口した自然洞穴を利用したものである。戦後移転を余儀なくされたため、現在、被葬者は不在である。洞穴入口の幅約3m、高さ6mの縦長部分に切石積みによって外界との閉塞石としているが上部まではおぼないと見られる。内部は広く約50m²ほどある。急斜面にそって墓道の石段は作られているが、前庭部の広場の痕跡はない。

No.2 金満按司墓より10m西側に、西に開口した小さな自然洞穴を利用した墓がある。墓口を野面積みで覆った墓で、前庭部に石碑を建立した基部が残る。『北谷村誌』にみられる兼盛豊佐敷筑登之興道とされる人物の墓と思われる。

No.3 崖の中腹に方形に掘り込まれた2基の墓で、入口近くの上下面に径15cmほどの円柱状の凹みがある。外界とは木材によって閉ざしたと見られる墓である。今帰仁村運天港にみられる崖葬墓と形態的に類似している数少ない墓である。

No.4 北谷城の石積みの輪部が残り、3つの郭が確認されている。

No.5 崖下のゲート近くで、フェンサ下層式土器の採集できる地域である。

No.6 近世の陶磁器が出土する地域である。崖下に「塩川」と称する湧水池がある。塩水を含むという。北谷城主の死活を左右した伝承の残る湧水である。

No.7 今回の発掘調査地域にあたる。

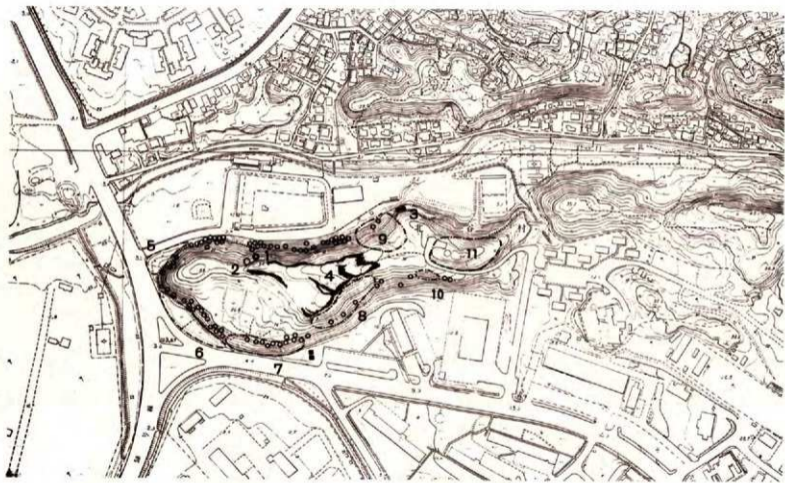
No.8 崖上や崖下で陶磁器やフェンサ下層式土器やグスク土器が採集できる地区である。中でも青磁片が目につく地区である。

No.9 伊波・萩堂系の沖縄先史時代前Ⅲ期の土器片が採集できる地域である。

No.10 崖の中ほどの狭い範囲にフェンサ下層式土器や貝殻が採集できる地区である。崖上のタンク施設のあるNo.11地区の一部の可能性もある。

No.11 1960年の『文化財要覧』に多年田真淳氏によって北谷城貝塚と紹介された地区である。細片の土器が採集される。

城周辺の丸記号は崖の中ほどや下に形成された古墓群である。按司墓などを含めると82基になる。なかには墓室内の奥にもう1つの墓室をもつものや、1枚石を組合わせて箱状の石棺としたものなどもある。



第2図 北谷城遺跡群



第3図 北谷城と発掘区 (1/2000)

二 調査の概要

1. 調査に至る経過

発掘区域は1979年、1983年の調査により、北谷城遺跡群のひとつである第7地区の分布範囲に含まれる地域と考えられ、今回の調査のはこびとなった。

発掘調査前の試掘では鉄塔建設工事の4つの基礎足の内、東側の2ヶ所についてはすでに削平され、文化層の堆積物はなく、西側の2ヶ所に確認できるのみであった。北側背後にあたる北谷城丘陵部の露頭断面の観察によると、標高7m前後をもって平坦に地均がおこなわれ、たまたま鉄塔建設予定地が旧斜面地形の残部の境にあたり、基礎足の西側2ヶ所以西に下半部の堆積層は広がるものと思われる。

発掘調査面積は鉄塔基礎足の工事予定地の範囲にかぎり、5×5mグリットの2ヶ所、50m²をその対象とした。北側グリットを北区グリット（以下、N区と略）南側グリットを南区グリット（以下、S区と略）と名を付した。

2. 調査組織

調査責任者	真栄城兼徳	(北谷町教育委員会教育長)
事務局	崎原 盛信	(北谷町教育委員会社会教育課長)
	比嘉 由孝	(北谷町教育委員会社会教育主事)
	宮平 律子	(北谷町教育委員会社会教育課臨時職員)
	伊波 里美	(北谷町教育委員会社会教育課臨時職員)
調査主任	中村 愿	(北谷町教育委員会社会教育課書記)
調査員	照屋 孝	新里 斉 国吉 喜盛 亀川 盛勝
	照屋 助吉	仲村渠春義 比嘉 至栄 賀数 朝進
	石新 実	島袋ヨシ子 稲嶺 春子 石川 光江
	金城 信子	金城 千代

3. 発掘の経過

今回の発掘調査は1984年6月25日～7月14日の延べ19日間おこなった。

発掘調査中、S区の中央部に数噸の石灰岩岩石の転石がみられ、その下部は包含層にまで達するものであるが、湧水や土壌が軟弱なため、不安定な状態であり調査者の生命が危惧され、重機や削岩機を使用し撤去せざるえない状態であった。また、表土下2mレベルからは地下水の流入がみられ、中でも粘性の強い包含層の調査では遺物の収集に調査者の手足がとられ、調査日数にかなりの過重が負せ

られた。調査が進むにつれ、地下水の水量は増し、1.5時間おきに吸引機を使用せざるえないほどになり、それに起因する壁面の崩れもたび重なり、第IX層の一部や第X層の包含層下位についてはS区の西半分グリットの発掘調査のみにとどめざるえなかった。

包含層の調査は湧水との関係上、短期にしかも集中的におこなわなければならず、特に貝殻の集中する部分についてはブロックサンプリングをおこない、調査後、水洗選別法を採用した。

三 調査の内容

1. 層 序

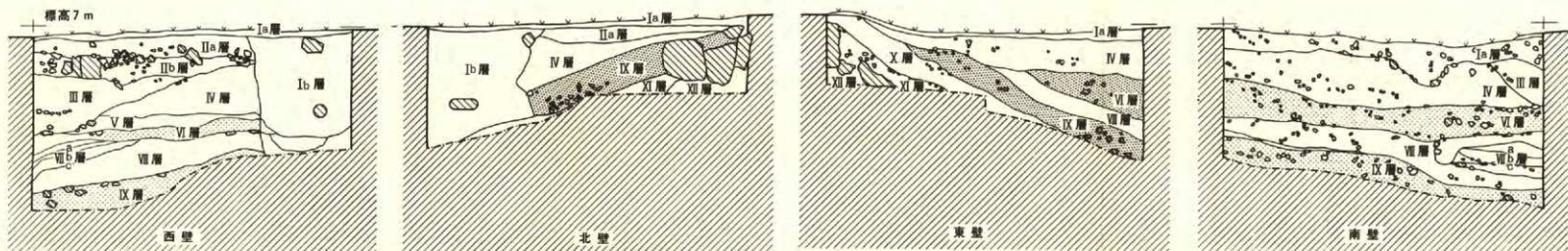
調査地区は削平や二次堆積がたび重なり、人の手が加えられ、一部、文化層の上面にまで攪乱を受け、旧地形の面影がみられないほど複雑な様相をなしているが、かろうじてN区、S区にプライマリーな包含層が確認できた。包含層の堆積は背後の露頭断面の観察や発掘区の層序から、全体的に南西方向に傾斜しており、N区の北東角が最も浅く、S区の南西角が最も深い様相を呈している。第I層から第IV層までは削平後、東側の地域から持ち込まれた二次堆積であり、近世や現代の生活品が混在する攪乱層である。包含層で最も浅いN区の北西角には表層からIX層にまで達する送水管施設用の掘り込みがみられた。

I層 5～7cmほどの厚さで暗褐色を呈した腐植土層である。I b層はN区の北西角にのみ見られる深さ約1.9mの溝であり、後述の第IX層にまで達する掘り込みで、戦後、米軍の送水施設管の痕が見られる。

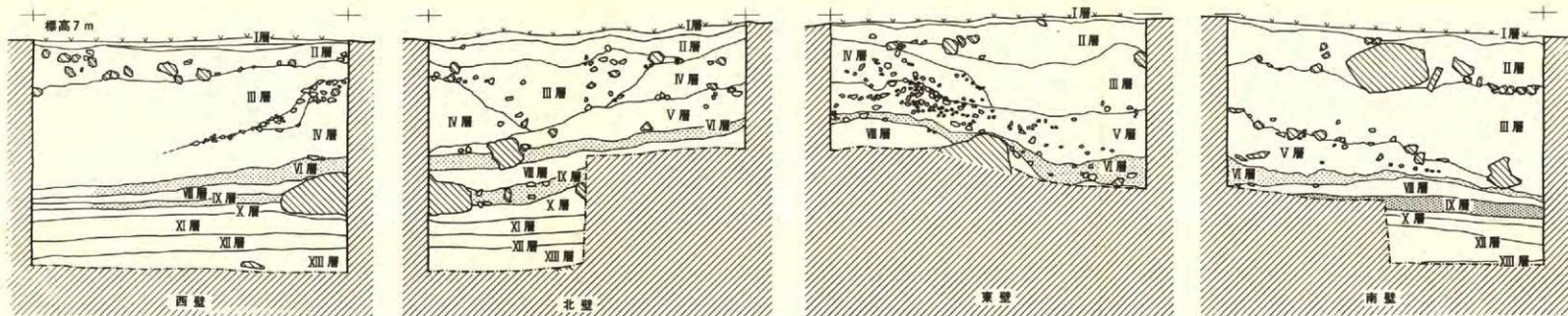
II層 一部分、旧屋敷址の切石岩礎の配石や当時の生活遺物、有機質を多量に含む暗黒色混礫土層である。N区の西壁面に旧屋敷址の配石がかろうじて残るのみで、大部分は攪乱を受けている。

III層 後述の第IV・V層の凹凸部の凹地に堆積した黄褐色混礫土層である。厚い所で1.9mと調査中、最も厚い無遺物層である。同層はN区の西壁面からS区へ流れ込むものと、S区の東壁方向からのものとが合流し、南西方向へ流れる堆積状況である。

IV層 有機質を多量に含むが、粘性のないサラッとした暗褐色混礫土層である。礫は拳大で層中最も多く含む。堆積の状態はN区では斜面にそって全壁面に観察できるが、S区では北東角と北西角に厚く、南壁側には極端に薄い。これは下層の第V・VI層も同様であるが、S区の中央部に検出された数噸



北区グリット (N区)



南区グリット (S区)



第4図 土層断面実測図 (1/600)

の石灰岩岩礫によって土砂の流入が妨げられた結果によるものと思われる。同層は下層のV層に重なる状態で凸状に堆積し、上層の境目にも川床などにみられる流水の痕跡のないことから、背後から一気に土砂が流入し、形成したものと思われる。

V層 第IV層に比べ、やや赤味があった褐色混礫土層である。N区では西側部分のみにみられ、S区の北東角に顕著に残る層である。同層も第IV層と同様にS区の南西側に拡がりはない。S区の東壁側では数ヶ所に筋状に貝殻の堆積がみられるが、後世の遺物も含むことから、背後の包含層の流入による二次堆積の結果によるものと思われる。

VI層 暗褐色で石灰岩質の砂利を含む粘性の強い土壤で、貝殻がレンズ状に集中する層が数枚重なる混貝土壌の文化層である。N区では包含層も数十センチと厚く出土量も多いが、土壤の粘性がやや弱い。人工遺物の出土はこれといった集中地もなく散在する状況であり、貝殻の出土との比例関係もみられなかった。

VII層 N区の南西角にのみ見られる落込み層である。他の層に比べ掘削しやすい軟弱な灰褐色土層である。人工遺物の出土する中心部はやや黒味をおびVI層に類似するが、その周辺部は黄色をおび第VIII層の無遺物層に移行している。

VIII層 黄褐色のバサバサしたシルト状の石灰岩風化土層である。S区の南西角にゆくにづれ、粘性の強い島尻層群(クチャ)の混入が多くなり、土色も暗灰色に移行してゆく。

IX層 暗褐色で拳大の礫や有機質を多量に含む混貝土壌の文化層である。第VI層の文化層に比べ、層の厚さも薄く、遺物の出土量も少ない。

X層 X層以下の調査はS区の西側半分のみにかぎっておこない、下層の文化層の発見につとめ、島尻層群(クチャ)まで掘り下げることにした。

X層は有機質を含む灰黒色粘土層である。

XI層 鶏卵大の石灰岩を含む赤褐色のシルト土層である。

XII層 有機質を含むが、汚染度の少ない灰色の島尻層群(クチャ)である。数個の木片が検出された。

XIII層 褐色の砂岩層(ニービ質)に島尻層群(クチャ)が混在する暗褐色混土砂層である。所々に硬質砂岩(ノジュール)の礫(ニービの骨)を含む。無遺物層である。

XIV層 灰色で島尻層群(クチャ)の泥岩の基盤層である。

種別 出土地		土器		青磁		白磁		陶器		褐釉陶器		厨子甕		ナリ鉢		鉄 瓦 片				
		口	胴底	口	胴底	口	胴底	口	胴底	口	胴底	口	胴底	口	胴底					
表	採	個数	3	2	8	2		1	6	12	6	2	8		5	1	2			
		重量	50	8	50	182		115	73	286	618	10	154		115	58	66			
N 区	表	採	個数	17			1	1		7	12	6	4			1	1	1		
			重量	138			66	3		108	88	242	94				12	95	15	
	攪	乱	個数				1													
			重量				71													
	磔	層	個数	1																
			重量	28																
	I文化層	個数	1	42	2	34	41	11	1	1	7	32	1	24	1				1	
		重量	6	254	70	269	250	618	6	1	6	132	458	2	45	44			8	
	II文化層	個数	6	71	5	3	2		4	1		5								
		重量	58	847	120	32	26		60	16		170								
S 区	攪	乱層	個数	2	2	2	2	1	1		11	23	6	1		1		21	5	
			重量	6	8	19	2	84	2		200	734	530	84		48		808	367	
	磔	層	個数							4										
			重量							50										
	I文化層	個数	9	1	19	20	12	1	1	3	14	4	15	1					1	1
		重量	80	4	228	200	300	46		20	49	361	340	465	94				10	4
	II文化層	個数	4	2					2	2										
		重量	28	15					1	4										
	試掘溝	個数			1				1		1									
		重量			2				8		12									

第1表 人工遺物一覽

2. 出土遺物

出土遺物の量は $5 \times 5 \text{ m}^2$ グリットの2ヶ所、 50 m^2 の調査面積のわりには少なく自然遺物の食料残渣はマガキガイやハマグリが特に多く目につくが、これといっ
て多いわけではない。人工遺物の出土量は少ないわりには青磁・陶器・土器・褐
釉陶器等種類にバラエティーがみられ、この時期に出土する遺物の特徴を保持して
いるように見受けられる。

土 器

出土土器は総数168点と少なく、いずれも細片で復元可能なものはない。

種類はくびれ平底の特徴をもついわゆる砂丘系土器と、鍋形状のグスク土器、
陶質土器に分けることができる(第1表 人工遺物一覧)。

口縁部や胴・底部の形状や胎土の諸特徴から分類をおこない、その基準は『北
谷城』の報告書になった。

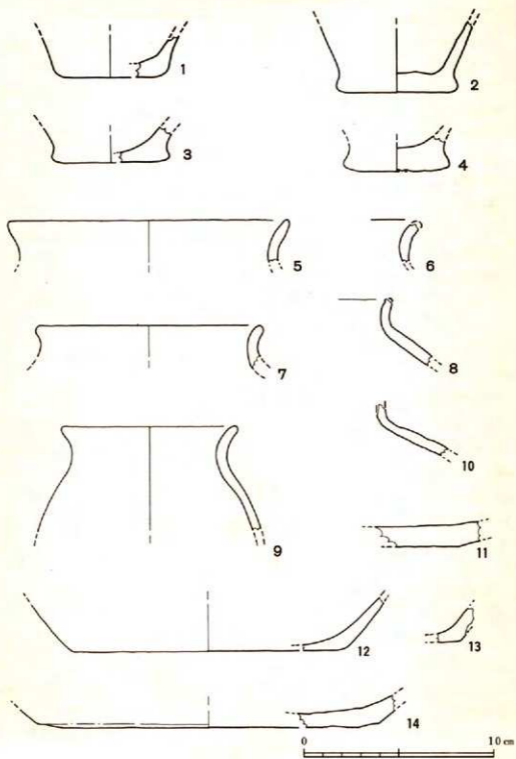
A類 やや外反する口縁部にくびれ平底の底部をもつ、いわゆる砂丘系土器で
ある。

Aa類 口縁部は9点出土しているものの、細片のため、その形状をうかがい
知るものはない。第5図1～3の底部は底面部に厚みがなく硬質である。底部は
くびれ部分が弱く、直線的な立ちあがりをもつもの(同図1)や、くびれ部分が
明瞭に残るもの(同図2・3)もある。器面は内外ともにザラつきがみられるが
全体的に作りは良く、焼成も良く硬質である。胎土は細かな精選された砂粒状で
細かな鉱物や赤ツブの混和材をも含んでいる。7mm前後の薄い器壁をもつ特徴が
ある。

Ab類 Aa類と同様な形状を保持していたと思われる砂丘系土器のグループ
である。

第5図4の底部のごとく、くびれ平底部分の底面が厚ぼったいものが特徴であ
る。粘土質の胎土に粗い石灰岩礫や赤ツブの混和材をもつ土器で、器面がアバタ
状になるものもある。焼成は良いものの、全体的に丸味をおび、しまりのない土
器である。

B類 容器の高さに比べ底径の大きい平底の鍋形土器で、胴部は球状に張りをも
つ特徴のある、いわゆるフェンサ上層式土器と呼ばれるものがある。



第5图 土器实测图 (1/2)

1·4~6·9~12·14 (N区IX), 2·3·7 (N区VI), 8·13 (N区IX下部)

Bc類 同図5・6・10は頸部がくの字状に外反する土器である。口唇部は欠落しているものの、同図5の形状から舌状を呈しているものと思われる。器壁はアバタ状をなし、貝殻の細片や石灰岩礫の露出が顕著にみられるもの(同図10)もある。量的には少ないが、赤ツブの混入もみられる。胎土は精選された細粒状のものを用いている。

Bd類 同図7・9・11・12・13は器形や器面の調整もBc類に類するが、混和材に粗い貝殻片や赤ツブを多量に用いた粘土質の胎土で作られているグループである。B類の中でも特に器面調整がよく、褐色を呈する土器であるが重量感の弱いものである。11・12の平底土器の底面部は凹凸が強く、12の底面部には貝殻の細片や石灰岩礫の附着が著しく全面にみられる。混和材の一部とは考えがたく、容器の成形の際、回転台の代用として、附着防止のため用いられた痕跡とみうけられる。

Be類 同図8・14の土器はBc・Bd類の中間的な胎土を保持しているが、黒色や白色の鉱物を含む特徴がある。滑石の混入はない。

A類の砂丘系土器はフェンサ下層式土器のグループであり、B類はグスク系土器のフェンサ上層式土器のグループと思われる。両者には器形の相違が著しく、系統を異にする土器群であるが、混和材に赤ツブの混入がみられる共通点がある。

青磁

今回出土の青磁は碗・盤・皿の3種類が得られた。出土量は碗が最も多く、盤・皿とつづく。

碗は口縁・底部の形態的な特徴や文様の有無、その構成の諸特徴により、下記のように分類した。

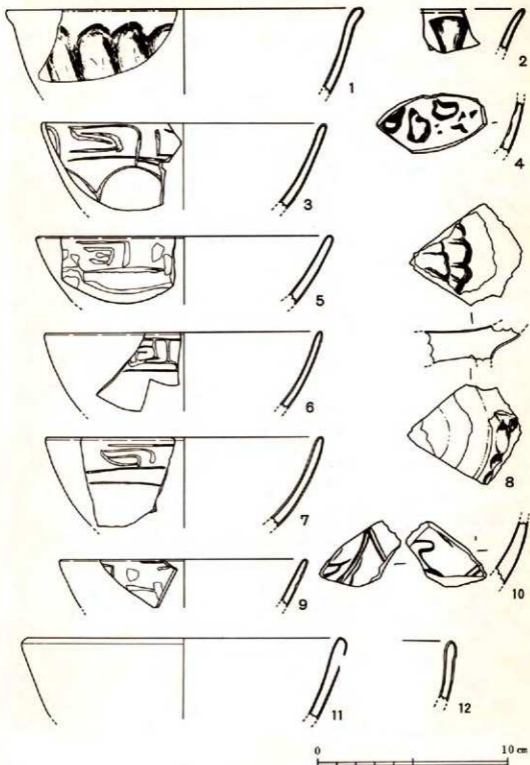
直線的な口縁部の外器面に蓮の花弁を模倣した蓮弁文直口口縁タイプ(I類)。直線的な口縁部の外器面に雷文の文様を施した雷文直口口縁タイプ(II類)。無文の口縁部が直線的な無文直口口縁タイプ(III類)。無文の口縁部が外側にそり返る無文外反口縁タイプ(IV類)に分けることができる。

I類 蓮弁文直口口縁タイプ

II類 雷文直口口縁タイプ

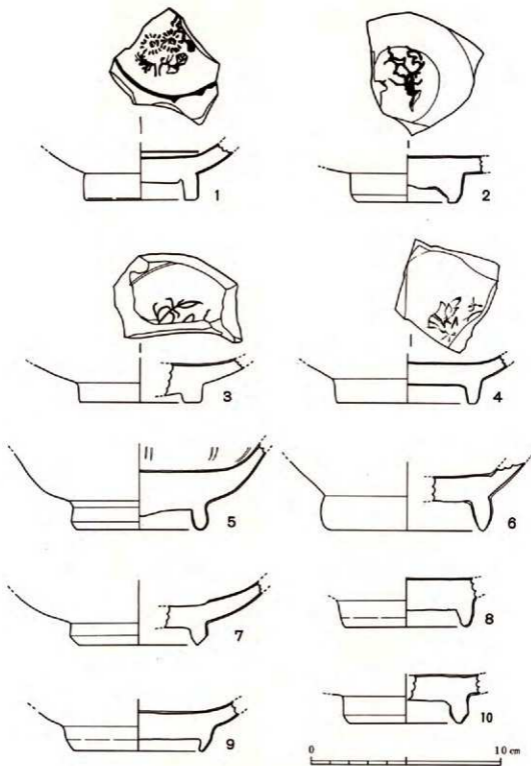
III類 無文直口口縁タイプ

IV類 無文外反口縁タイプ



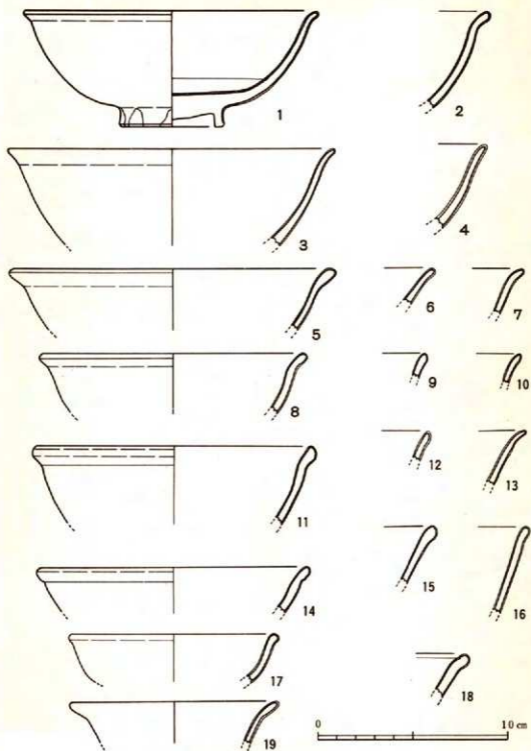
第6图 青磁碗实测图 (1/2)

1·3·5~7·11(N区VI), 2·4·10(表探), 8·12(S区VI), 9(N区VI下部)



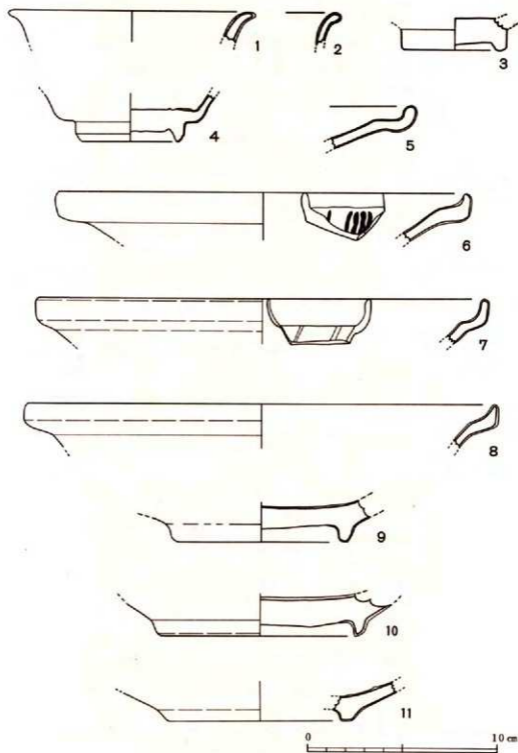
第7图 青磁碗实测图 (1/2)

1 (N区搅乱), 2 (S区V), 3·5·7·9 (N区VI), 4·6·8·10 (S区VI)



第8图 青磁碗·血实测图 (1/2)

1~3·6·8·12·13·15·16·18·19 (S区VI), 4·5·7·9~11 (N区VI), 14·17 (S区搅乱)



第9图 青磁碗·盘实测图 (1/2)

1~7·11 (S区Ⅵ), 8 (N区Ⅵ), 9 (N区表探), 10 (S区Ⅴ)

碗の胴下半部・底部では内外器面に文様をもつタイプ（V類）、内面のみにもつタイプ（VI類）、無文で終止するタイプ（VII類）に分けることができる。

V類 内外器面に文様をもつタイプ

VI類 内器面のみにもつタイプ

VII類 無文で終止するタイプ

I類 第6図（図版11）1・2の2点のみの出土である。同図1は太めの沈文により蓮弁を描き、概念的に浮彫りの効果をねらったものである。口縁部の断面観はやや丸味をおび、脹らみをもつ。蓮弁文様がシャープに欠ける点や、断面観に丸味をおびることなどから、この類の中では新しいグループに含まれるものと思われる。同図1は漂白作用を受け表裏面ともに淡黄色を呈している。

同図2は蓮弁文間を篋状工具により凹め、各蓮弁を精巧な浮彫りにしたものである。碗の中では最も薄い方に属する。口縁部は有角にカッティングされ先細みを呈している。軸は薄く、淡いオリーブ色で光沢があり、精巧である。

II類 第6図3・5～7・9は外器面に雷文を描き、丸味のある胴部から舌状な口縁部へ細るものである。

同図3は縦横の直線を凹線によっておおまかな区画を描き、その区画内に流麗な雷文を埋め、その下半部にも同様な工具により弧文が描かれている。下半分の弧文は一般にラマ式蓮弁文や草花文が配されるが、後者の方と考えられる。光沢のある暗オリーブ色を呈する。荒めの貫入が走る。

同図5は3と同様な文様構成をなすが、やや太めの凹線により描かれている。横位の区画線の下端部にみられる鋸歯状の痕跡や、右隅にみられる凹線の広がりから、文様は篋状の工具によってひと息に描かれたものと思われる。器壁はII類の中では7と同様な厚いグループに属する。光沢のあるオリーブ灰色の軸に包まれている。同図9は5と同様な諸特徴をもつが、器壁が薄く、器形もやや小形である。

同図6・7は細い沈線で流麗な雷文が描かれたものである。沈線の掘り込みは観察しかねるほど浅く、特に6の内器面にはそれと思しき痕跡の残るものの、判然とせず、この類に含めた。6・7共にオリーブ灰色をなす。前者は光沢が鈍るほど細かな擦傷が残るが、後者にはその痕跡はなく、大まかな貫入が見られる。

III類 同図11・12は口縁部が直線的な断面観をなすもので、2例のみの出土である。11は口縁部が最も厚く、胴部にゆくにしたがい細まるものであり、12は口縁部が丸味のある肥厚部をなすものである。いずれも乳色ぎみの灰青色を呈し不透明であり、荒目の貫入を有する。

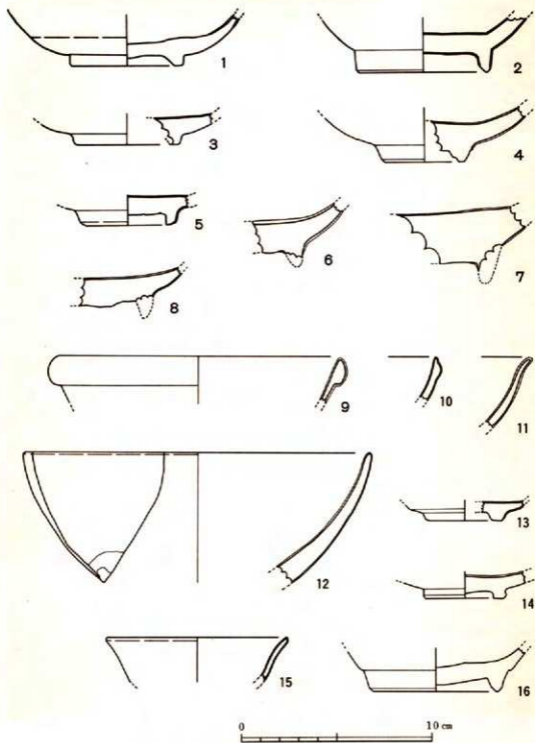
Ⅳ類 第8図(図版13) 1~19は無文で口縁部が外反するタイプである。外反する度合や口縁部の膨らみは一様でなく、丸味をもつもの(2・5・8・15・18)や細まるもの(3・4・7・13)もある。中でも同図11は外反した口縁部が口唇部を絞めることにより、断面三角形状にみえるものもある。

同図1は図上復元可能な唯一の青磁碗である。外反する先細みの口縁部から丸味のある胴部にかけては厚みが均一に保たれているが、底部では1.5cmと厚みを増すものである。外底部にも一部釉が流れ、畳付にまで至る。内外面とも漂白されたように色褪せ乳青色を呈する。園内に凹み状のものがみられるが、文様の有無については判然とせず、一応この類に含めた。同図2も1に類似するものと思われる。光沢のある豆青色の釉のかかるものである。

Ⅴ類 胴下半部・底部の内外器面に文様をもつものは第6図8・10の2例のみの出土である。同図8は園内と高台近くに片切掘りで蓮弁文を描くものである。外底重ね焼痕が露胎となる他はすべて釉がかけられ、光沢のある淡い緑色を呈する。同図10は胴下半部に流麗な細沈線文が描かれたものである。釉が薄く、光沢のある淡い緑色をなすものである。

Ⅵ類 胴下半部・底部の内器面にのみ文様をもつのは第6図4、第7図(図版12) 1~5の6点である。第6図4は凹凸の顕著な花文が施されているが、片切掘りで描かれたものが、スタンプによるものかは判然としなない。釉が薄く、光沢のある淡い緑色をなすものである。第7図1~4は園内に印花文を施したものである。同図1は菊の花状のスタンプを用いたもので、外底部の重ね焼痕が露胎となる他はすべて豆青色の釉が施されている。同図2~4は牡丹の文様を押印したものである。2・4は外底部の重ね焼痕が露胎となる以外は淡線色の釉がかり2は光沢が残るが、4にはなく失せている。両者の高台は外側のみの削りが残る。3は外側の胴下半分以下は露胎で終止している。高台は角の残る方形を呈している。同図5は2条を対とする縦位の沈線文が等間隔に6列施されるものである。類例品の文様構成をみると縦位の沈線文間には印花文が施される例が多い。外底部の重ね焼痕が露胎となる以外は暗緑色の釉がかり、しかも、2.3cmと底部も厚く、重量感のある碗である。

Ⅶ類 第7図6~10、第9図3・4、第10図1~8は無文で終止する青磁の底部碗である。第7図7~10は畳付まで釉がかかるもので、7・9露胎部は褐色を呈している。7は園内にも露胎をもち、灰褐色を呈する。第7図6は外底部の重ね焼痕が露胎となる以外は光沢のあるオリーブ色の釉がかかり、作りがていねいである。第10図5~8は高台部分が欠損しているが、外底部の重ね焼痕の部分が露胎となることから第7図6と同様な様相であろうと思われる。第10図7の



第10图 青磁碗·盆、白磁碗实测图 (1/2)

1·2 (N区表探), 3·4·7·8·13·15 (N区VI), 5·10·16 (表探),
6·12·14 (S区VI), 9·11 (N区IX)

底部は光沢を失せているが、他のものは光沢があり、作りがていねいである。第7図7、第10図1・3は胴部下半部以下は露胎となるものである。第7図7は園円内にもリング状に重ね焼痕がみられ露胎となる。第10図1は園円内すべてが露胎となるものである。両者とも底部が薄い特徴がある。

盤 第9図5～11は青磁盤で7点の出土である。口縁部の形状は胴部から頸部にかけて水平方向に折り曲げ、更にその先端を鋸状に折り曲げるものである。今回の出土は4例ともこの類のものである。同図5は胴部内面に細蓮弁文らしき痕跡がみられるが判然としない。光沢は弱く、淡緑色の釉がかかる。荒い貫入をもつ。同図6は胴部内面にやや太めの蓮弁文を施すものである。透明度の高い光沢をもち、淡青色の釉がかかる。荒い貫入をもつ。同図7も太めの蓮弁文をもつものである。同図8は頸部の部分で欠損しているが、その痕跡はとどめている。同図11は盤の底部である。太めの蓮弁文をもつが園円内には至らない。7・8・11の釉は漂白され、灰褐色を呈する。特に8・11の断面は酸化し、褐色を呈している。焼成後、ふたたび火を受けたものと思われる。8の口径は25cmであり、11の底径は9.8cmである。この種のタイプでは一般的な大きさである。

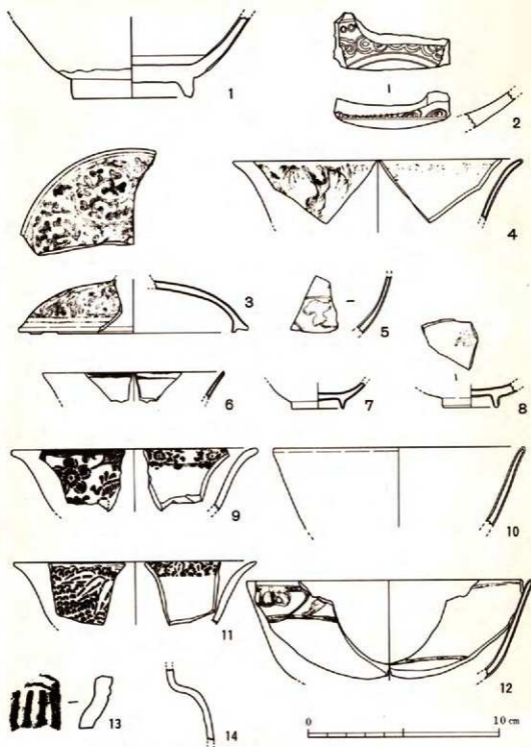
白磁

口縁部5点、底部3点、胴部1点の計9点の出土である。

第10図9・10は口縁部に肥厚部を形成するいわゆる玉縁口縁の白磁と呼ばれるものである。9は肥厚部分が1.5cmとやや大きめの玉縁をなすものである。釉は薄く、貫入のあるやや緑がかった乳白色を呈する。10は0.5cmの小形の肥厚部をなすもので、しかも口唇部が先細になるものである。肥厚部を貼り付けて形成する9に対し、10のそれは肥厚部の上下部分を削り取ることで凸帯部を意図したものである。薄く青白い釉を施している。

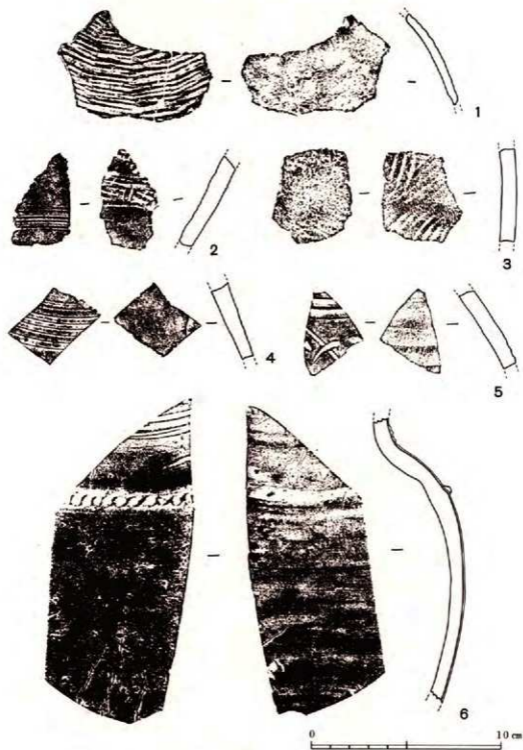
同図11は口縁部を先細に外反させた小形の碗である。釉は薄く貫入のある淡青色をなすものである。同図12は胴部から口縁部にかけて細くなり、内湾する大形の碗である。胴下半部に露胎部を残す他は青白色で薄い釉を施す。細かな貫入をもつ。同図16は碗の底部である。外側の高台近くや一部高台まで流れた青白色の釉がわずかに残るのみで、他はすべて露胎部である。園円内に重ね焼きの痕跡を残す。

同図13～15は小形の皿である。15は口縁部がやや外反し、口唇部の釉が掻きとられた口禿げである。内面は白色であるのに対し、外面は青白色を呈する。両面とも釉は薄く光沢をもつ。13・14は小形皿の底部である。13は甕付の一部と外底部は露胎で他は白色の釉が施されている。高台に弧状の抉り込みを施す。園円内



第11图 天目·高麗青磁·染付·陶器実測図 (1/2)

1 (N区表採), 2 (S区Ⅵ), 3·6·7·12·13 (表採), 4·14 (N区Ⅵ),
5 (N区攪乱), 9~11 (S区攪乱)



第12圖 中世陶器・類須惠器・須惠器・陶器実測図 (1/2)
 1・2 (N区VI)、3 (N区IX)、4・5 (N区表採)、6 (表採)

には三角形の、畳付には流入釉の部分に重ね焼の痕跡を残す。14は内面に細い貫入のある薄い白色の釉が施されるが、外面胴下半部は露胎のままである。

天目

天目は第11図1の1例のみで、胴下半部の残る資料である。底部内面と高台近くは露胎部を残す。その上部は黒釉が厚く施され、中でも露胎部の境で厚くなる。露胎部にはロクロ痕を明瞭に残すが仕上げは丁寧である。内部底面に露胎部を残すことや、高台の高いことなどから新しい時期の天目茶碗であろう。

高麗青磁

第11図2は胴部片の高麗青磁碗で、1例のみの出土である。内外面に白土象嵌の文様が描かれ、灰青色の釉が施されている。内面には上下に横位の園線を巡らし、その間の上位に竹管文、下位には渦巻や二重弧文を配置し、外面には同様な園線間に蓮弁文を描く。素地は灰色を呈する。

青花(染付)

第11図3～8の内4・5をのぞく他は現代のものである。同図4は外面に垂柳状の木が描かれ、内面には口縁部下に四方禪文を施す。外面の文様は藍色の濃淡を意図しているのに対し、内面の文様帯は淡い。同図5は胴下半分の細片である。松葉状の文様が暗青色に、内面には二条の界線が淡く描かれている。両者とも薄く光沢のある釉がかかる。

中世陶器

ロクロを使用し、窯で焼くことなどは須恵器と同じであるが、焼きがあまりく、酸化炎焼成で焼かれるものである¹¹⁶。技術的な伝統がうすれ、12世紀～15世紀にかけてみられる。

第12図1はわずかに1例の出土である。菱形の肩部の小片で、外面には褐色で平行叩き目がおこなわれ、内面は灰褐色を呈し、丸味のあるあて具を使用した痕跡を残す。器壁は4.5mmと薄く、入念な叩き締めをおこなう。素地には黒色や白色の細い鉱物が混入する。類例の少ない資料であり、北からの請来品であろう。

類須恵器・須恵器

第12図2は厚手の器壁をもち、格子目の叩き痕をもつ胴部片である。内外面とも暗灰色をなし、芯は褐色を呈する。南島に一般的に見られ、いわゆる類須恵器

と呼ばれるものである。

第12図3は大形容器の胴部片で、内外面に叩き痕をもつ。外面は暗緑色の自然釉に白い斑点がみられる。内面は青海波文の叩き痕がみられる。内面、芯ともに青灰色の素地である。北からの請来品であろう。

褐釉陶器

第11図13・14、第13図2～6の褐釉陶器はこれまで南蛮と呼ばれたものである。第11図14は小形壺で肩部から胴部にかけてのもので、1例の出土である。器壁が3mmと薄く、ロクロにより入念に仕上げられている。釉は暗褐色で薄い。精選された黒褐色の素地を用いている。

第13図2は口縁部が強く外傾し、口唇部には鏝をもつ。鏝の下端部は外側に丸く張り出し、上端部は内側へ先細みとなる。内面の釉は白色化し、アバタ状をなす。素地は暗褐色を呈する。壺形の褐釉陶器かと思われる。

第13図3は口縁部が強く外傾し、口唇部の下端部に三角形に張った鏝をもつ。三辺の中央部には水引によって凹部をつくる。釉や素地の特徴から同図5は同一個体である。底部はやや厚く直角に立つ安定のよいものである。釉は薄く緑褐色をなし、底面部と一部内面胴部下半分に露胎を残す以外は施釉されている。口縁部から頸部にかけてはロクロにより入念に仕上げられているが、胴部は叩き絞めの痕を残し、内面には輪積みの痕まで残る。素地は黄褐色をなし、多量の混和材を含む。

第13図4は3より口縁部の反りが強い壺形の褐釉陶器である。同図6は釉や素地の特徴から4の同一個体の胴・底部である。同図4・6の器形は口縁部が強く反り、肩部で最も張りだし、そのまま底部へ直線的に細まる器高の高いものである。底面は座りのよいU字形の上げ底になっている。内底面に渦巻状の凹凸が残る他はすべて入念な器面調整がおこなわれている。暗褐色の釉がほぼ全面に施されるが、外底面とその立ち上がり近くは露胎である。細い鉾物を多量に含むが、縮まりのある灰色の素地である。

播 鉢

第14図1～4の4例が得られた。同図1は口縁部がL字状に屈曲し、頸部下は丸味のふくらみをもつ浅鉢である。内面には15本を単位とする櫛描きがみられる。素地に気泡を含むが焼きしめが良く硬い。灰褐色の器面と芯の間に薄い暗褐色の層をもつ。喜名焼きであろうか。同図2は直線的な胴部からL字状に屈曲する口縁部をもつものである。口縁部の端部は丸く、上面の平たい部分に凹線をもつ。

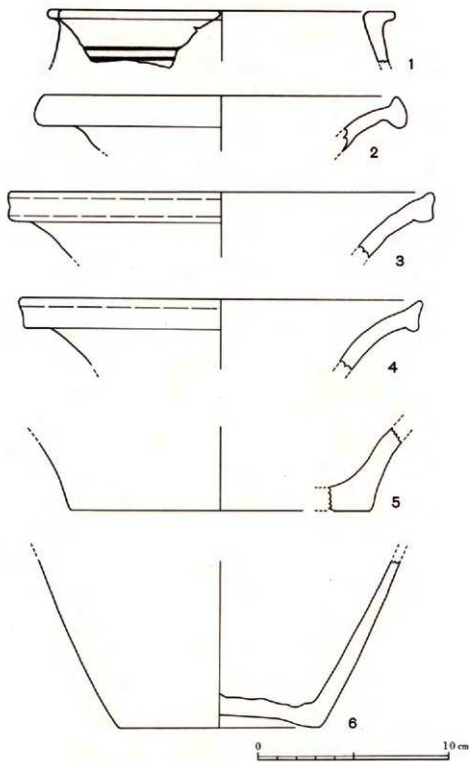
内面には一単位の数を確認できぬほどの細く浅い櫛描きがみられる。口縁部の一部に暗褐色をなす外は壺屋焼特有の褐色である。同図3は内面に9本を単位とするやや太目の櫛描きをもつ。焼きがよく暗褐色をなす。同図4は丸底状に内面を仕上げた、ひらきぎみの平底櫛鉢である。底面は数回の櫛描が重ねられ放射状をなしている。内外面は暗褐色を呈し、内部は褐色をなす。

陶 器

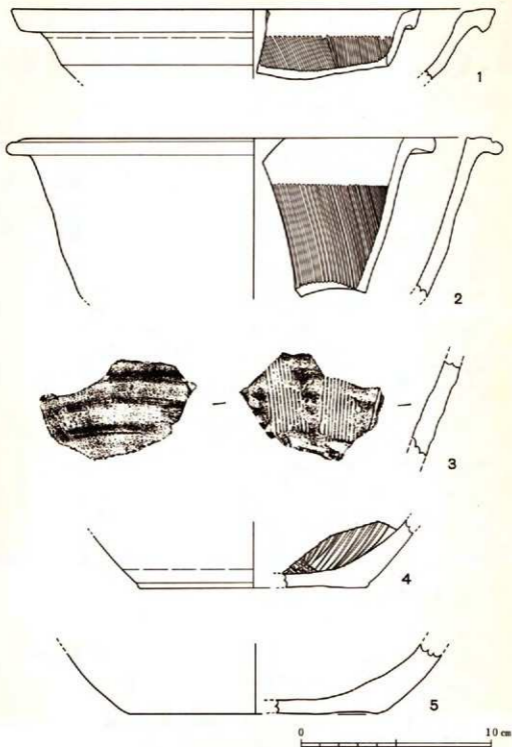
沖縄本島内で焼かれた陶器をここではまとめた。沖縄本島の陶器は大形で一般的に無釉な荒焼と、日用雑器として用いられる小形で施釉される上焼に分けることができる。

荒焼 第12図4～6、第14図5、第15図1～5は荒焼と呼ばれ無釉の焼きものである。第12図5は甕の肩部の破片で、外面に陶工を示す「メ」判の篋描きがみられるものである。外面は暗褐色で光沢がある。同図6は張りの弱い細長な甕である。頸部には3本の沈線文を、肩部には凸帯刻目の縄目文をめぐらしている。さらに肩部には篋描の判の残部がみられる。外面は光沢があり暗褐色の自然釉に包まれ、点々と釉の噴き出しもみられる。芯は暗褐色、内面は褐色をなす。第14図5は底面からの立ち上がりには稜がなく丸い浅鉢形の底部である。粗雑に仕上げられ、素地は褐色をなす。第15図1はL字状に反り返る口縁部をもつものである。口縁部の上面に1本の沈線を施す。素地は褐色をなす。同図2は口縁部の反り返り部分が太めに仕上げられたものである。外面は黒色の自然釉に包まれている。暗褐色を呈する素地は気泡を多く含むものの焼きは良く硬質である。同図3・5は口縁部に玉縁状の脹らみをもつ大形甕の口縁部である。両者とも淡褐色をなし、緻密で重量のある素地である。同図4は横位の把手をもつ変形陶器の肩部片である。外面は乳白色の自然釉の噴き出しがみられる。内面は暗褐色をなす。

上焼 第16図1～10は上焼きと呼ばれ施釉される沖縄陶器である。同図1は口縁部がL字状に反り返り、胴部に丸味の張りをもつ香炉形の陶器である。口縁部の上面から外面にかけ緑とコバルトブルーの二彩の釉がかかる。内面は露胎で素地と同じ黄褐色をなす。同図2は1と同じ香炉形の胴・底部の破片である。全体的に厚ぼったく、黄褐色の軽い素地を用いている。高台近まで色褪せた緑の釉がかかるが、他は露胎である。同図3は灰色で磁器に近い素地をもつ無釉の底部片である。同図4・9・10は内面に乳白色、外面には暗褐色の釉を施す碗である。いずれも内面の圓円内に重ね焼きの痕を残し、髹付は露胎で、黄褐色の素地である。いわゆるワンブーと呼ばれる碗である。同図7は円外面とも乳白色の釉を施

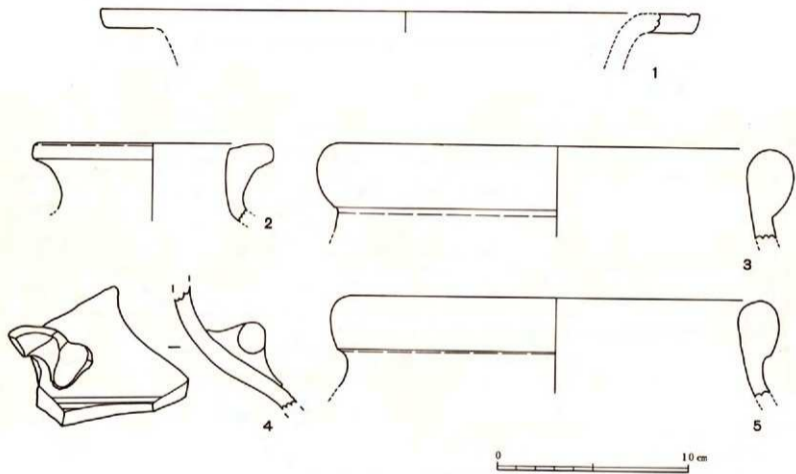


第13图 陶器实测图 (1/2)
1~4 (N区VI)、5·6 (S区VI)



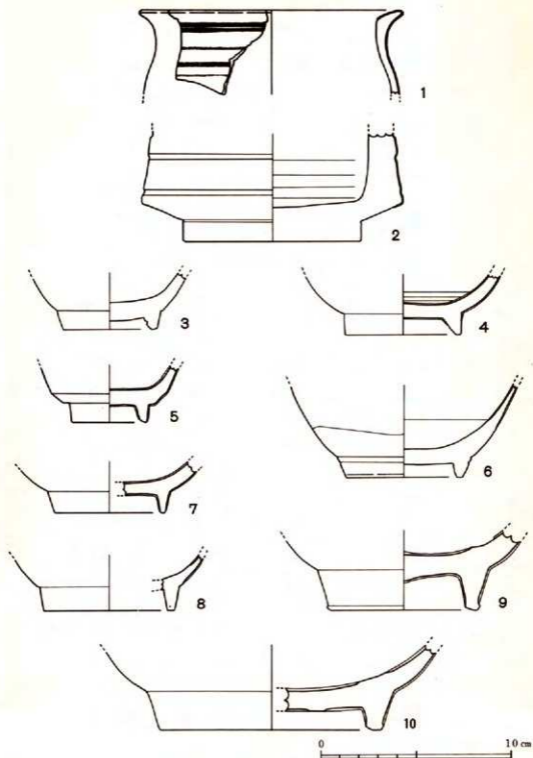
第14图 擂鉢・陶器実測図 (1/2)

1・2 (S区攪乱)、3 (表採)、4 (N区表採)、5 (S区攪乱)



第15图 陶器实测图 (1/2)

1·3 (N区表探)、2·4 (S区搜乱)、5 (N区V)



第16图 陶器实测图 (1/2)

1·3·6·8·10 (表探)、2·5·7·9 (N区表探)、4 (S区搅乱)

す碗の底部である。陶円内の重ね焼き部分と畳付は露胎である。軸には粗い貫入がみられる。同図6・8は内外面とも胴部上半分は薄い光沢のある灰緑色の釉を施すが、下半分は露胎のままの底部である。器壁が全体的に薄く、高台も高い。素地は黄褐色をなす。湧田焼きの碗である。

鉄製品

鉄製品の出土は第17図に示した4点である。いずれもいわゆる第Ⅴ層上部の攪乱層からの出土であり、包含層以外からのものである。

第17図1はヘラ（鉦と当て字）と南島一般に呼ばれる農耕具である。赤錆の付着が著しい。長さ21.5cm、幅4cm、の大きさで、7cmほどの頸部は両側より円状に折り曲げ、柄部を作り、下半部の刃部との境に肩部を作り出している。肩部から刃先部分にかけては直線的にやや細まる。側面観は全体的に弧状に湾曲し、正面が上部で背面が下面にあたる。同図ヘラは全体的な特徴から上江洲均氏の沖繩諸島型のヘラの特徴を保持しているものの、柄の作りだしの曲げ方が逆になっている。堆積中の変形によるものであろうか。

同図2は数センチの板状の鉄片である。3mmほどの厚さで、側面観は弧状に湾曲している。厚みや材質の特徴から鉄鍋状の容器と思われる。

同図3は12cmほどの角柱状の鉄製品である。2ヶ所で折れ曲がり、錆が著しい。用途不明な製品である。

同図5は3.5cmほどの角柱状の鉄製品である。頭部は打ちつけによる折れ曲っていることから鉄釘である。長軸下方で折れ曲りがみられる。

銭貨

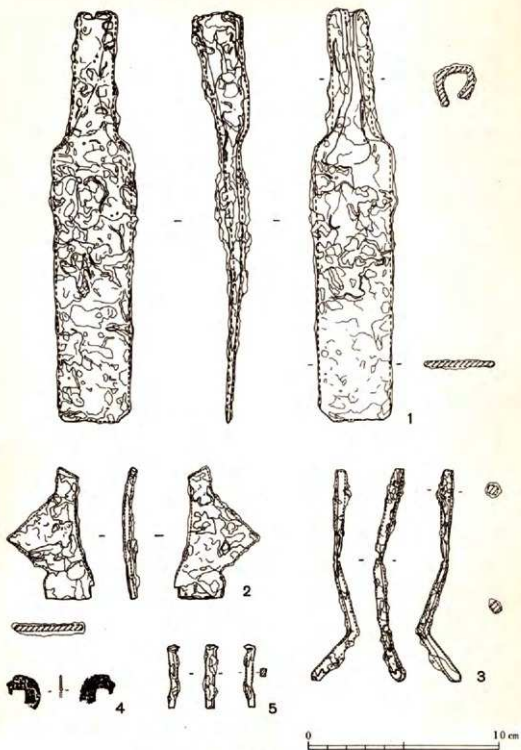
第17図4は約半分が欠失したもので、厚さ1.4mm、重量1.35gの銭貨である。文字は開口通口と読みとれる。裏面には文字の痕跡はない。

石器

人為的な使用痕のあるものを含めると9点の出土である。

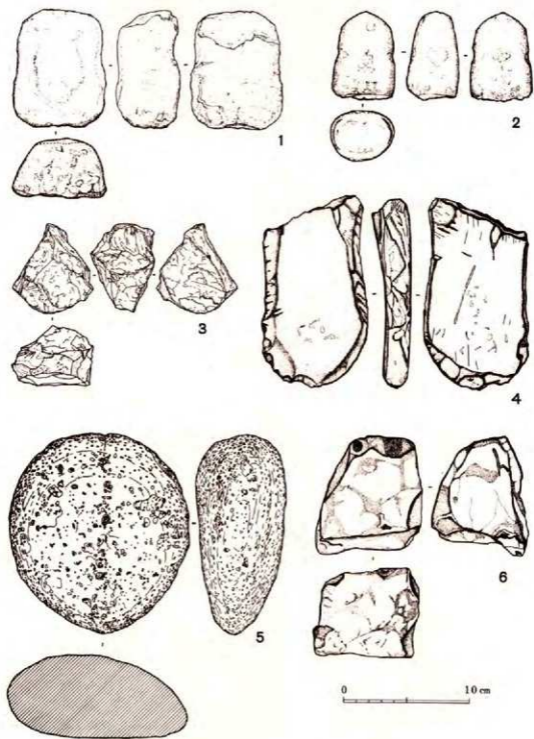
第18図1は拳大の台形状の凹石である。背面には打痕による凹みが顕著である。上下、両側面にも敲打痕はみられるが凹みは弱い。腹面は周辺部からの打ち欠きによって大まかな形をととのえた後、中央部に打痕による弱い凹みをつくっている。細粒砂岩性である。

同図2は鶏卵大の釣鐘形状の石器である。頭部は尖がり、細かな打痕による数面体の稜がみられる。断面が楕円形で底面にはやや粗い打痕がみられるものの全



第17図 鉄製品・銭貨実測図 (1/2)

1~3 (S区攪乱), 4 (N区VI), 5 (S区V)



第18図 凹石・敲石・スリ石・打ち欠き石器実測図 (1/3)
 1・3 (N区VI), 2・4 (N区IX), 5・6 (S区VI)

体的に平坦である。腹面や背面、両側面には打痕による径1.5 cm内外の凹みが見られる。敲石と凹石に利用された併用タイプである。石質は細粒砂岩性である。

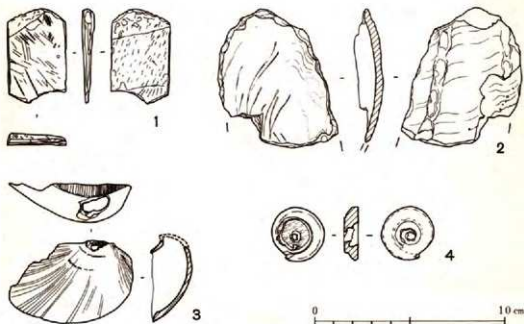
同図3は拳大の不定形の打製石器である。石質は硬い砂岩である。

同図4は正面と背面の両面を利用した板状の砥石である。周辺部は粗い打ち欠きによって形をととのえているが、頭部が欠損している。正面は凹状に背面は凸面状に磨耗を受けているが、後者はさらに十数個の直線状のキズが残る。砂岩性の石質である。

同図5は幼児の人頭大の大きさで、やや扁平な凹石である。石質は重量があり全面にアバタ状の特徴を有する。正面と背面の中央部と底面隅にわずかに打痕の痕跡を残すのみである。斑礫岩の石質である。

同図6は拳大の正方形の敲石である。頭部と底部に打痕の痕跡が残るものの、全面に水磨を受け、その痕跡が明瞭でない。細粒砂岩性である。

第19図1は粘板岩性の小形の石製品である。頭部と両側面はやや粗目の研磨によって形が調われているが、底部は破損している。正面は細かい研磨と斜のキズ痕が残る。背面は剥離面が露出している。



第19図 石製品・貝製品実測図 (1 / 2)
1 (S区Ⅵ)、2・3 (N区Ⅵ)、4 (S区Ⅴ)

和名	学名	個数	N 区		S 区				合 計					
			第I貝層		第II貝層		第II貝層		攪乱層					
			定形数	破片数	定形数	破片数	定形数	破片数	定形数	破片数				
マダガスカイ	<i>Comanusa Inchanus</i>	(Linné)	531	21 7901	304	18 4642	50	2 823	8	1 159	1	15	894	421320
アラシクマウガイ	<i>Gufurina bimidus</i>	(Roding)	399	73 1288	51	3 150	59	8 230	1	1	2		510	84 1700
リュウキウザルボウ	<i>Anadara anlypsa</i>	(Linné)	61	17 1609	37	1 756	12	312	1	35			111	18 2752
ハマグリ	<i>Mercetia haora</i>	(Roding)	550	154 1753	44	9 334	76	33 452	2	1 9	6	15	680	197 2563
ヌノメガイ	<i>Periglypta paucipa</i>	(Linné)	26	57 698	10	10 186	14	18 327					59	85 1211
オノノツノガイ	<i>Cerithium nodulosum</i>	(Bruguière)	37	2 995	16	466	13	465	1	20	2	73	69	2 1866
ハダマルヒメカタベ	<i>Dactyloca localis</i>	(Gould)	201	7 484	14	28	15	28					230	550
シマコガイ			20	30 1435	12	27 2371	7	2 830					39	59 4736
コサエヨアレ	<i>Vannus turbinellus</i>	(Linné)	22	1 425	4	56	2	26					28	1 507
マイマイガイ			313	4 566	34	75	18	21					365	4 663
ベニシレダカラ	<i>Tectus conus</i>	(Gmelin)	42	12 481	14	2 196	3	3 37					59	17 714
クマガイ			48	15 279	5	42	1	2 17					54	17 338
ヤコウガイ	<i>Lamatis marmorata</i>	(Linné)	1	18 267	4	4 114	2	1 18					1	24 215
アマキガイ	<i>Thelostyle albicilla</i>	(Linné)	64	216	6	23	3	4					73	243
メンガイ			20	9 418	2	1 28	6	4 190					28	14 646
リュウキウムシロ	<i>Nitidulites marginiferus</i>	(Dunker)	136	322 15	48	21 41							171	411
イトマトボウ	<i>Pleuropleca trapezium</i>	(Linné)	5	1 261	5	193	5	2 253					15	3 807
イモガイ			23	126 10	72	33 870			2	18			66	2 568
ヤラサハチ	<i>Tectus maxinus</i>	(Philipp)	4	6 182	3	1 179	1	1 69			1	55	9	8 485
タマガイ			26	1 90	5	29							31	1 119
クモガイ	<i>Lambis lambis</i>	(Linné)	7	2 712	7	5 686	2	1 509	1	249			17	8 2156
メソガイ	<i>Pleuropleca elongata</i>	(Lamarck)	15	15 48	6	15							21	15 64
フエガイ	<i>Berkhida decussata</i>	(Sowerby)	17	3 61									17	3 61
ツマボウ	<i>Lampasia aquetilis</i>	(Reeve)	7	114			1	4					8	118
スジサンゴヤドリ	<i>Covaltiphida costularis</i>	(Lamarck)	2	27	1	8							3	35
カワラガイ	<i>Fragum amide</i>	(Linné)	4	27	5	1 43	1	6					10	1 76
アカイガレイ	<i>Drupa spatulifera</i>	(Blainville)	2	64									2	64
ツノガイ	<i>Anadara senhaffii</i>	(Dunker)	31	72									31	72
リュウキウザルガイ	<i>Vaietardium florum</i>	(Linné)	3	2 28	1	3 30							5	5 70
アンボシタロサメ	<i>Lithocoma lituosa</i>	(Linné)	1	32	4	1 144							5	1 176
リュウキウマス	<i>Aspithis dichotoma</i>	(Anton)	3	3 11	1	2	1	2					4	4 15
チョウセンサマエ	<i>Marmarostoma argyromamm</i>	(Linné)	5	212	2	65	1	1 30			1	59	9	1 366
オキニノエガイ	<i>Berkhida laevis</i>	(Bruguière)			2	100							2	100
マダライモ	<i>Vitrocoosa ebriosa</i>	(Linné)	1	4	1	14							2	18
シロザル	<i>Chama buasica</i>	(Reeve)	1	120	1	30							2	150
シラタメガイ	<i>Mancinella armigera</i>	(Link)	1	55									1	55
ウノア	<i>Fatilloida</i>	(Linné)	1	2									1	2
シマウスレ	<i>Susetta concinna</i>	(Dunker)	1	10									1	10
モチヅキヤラ	<i>Cyclotellina renies</i>	(Linné)			4	74							4	74
マルオミナエシ	<i>Lioconcha castorens</i>	(Linné)	1	2									1	2
ネジマカガキ	<i>Lophocoma umicarinata</i>	(Sowerby)			2	20							2	20
ヤエヤマダレ	<i>Katejia Himantopus japonica</i>	(Gmelin)	1	15									1	15
キナレイシ	<i>Mancinella olonina</i>	(Roding)			5	115							5	115
ゴマフイモ	<i>Poncticulus pulcarius</i>	(Hwass)			1	28							1	28
アツキガイ	<i>Murex troucheti</i>	(Luchter)	2	28									2	28
スイジガイ	<i>Harpa chrysa</i>	(Linné)									1	213	1	213
ツノレイシ	<i>Monethalis tuberosa</i>	(Roding)									1	20	1	20
不 明			125	26 1317	8	4 397	7	35					133	38 1794

第2表 出土貝類一覽

貝製品

貝製品の出土はわずかに第19図2～4の3点のみである。

第19図2はヤコウ貝未製品である。周辺部には細かな打ち欠きによる形成痕が残るが、下端部は欠失している。背面の外縁部には研磨痕がみられる。

同図3はリュウキュウザルボウの頭部に内側から穴を穿ったものである。風化が進みもろい。

同図4はイモ貝種のビーズである。正面、背面に研磨の痕跡が残る。

四 ま と め

今回の発掘調査地域は北谷城遺跡群のひとつである第7遺跡の一部であることが明らかになった。

当地域は北谷城の南斜面下に堆積した貝層であり、大形岩石の間をぬった急斜面に堆積していることなどから生活の場ではなく、北谷城の丘陵上部から投棄された結果、形成した貝塚であることが判明した。

S区西側半分のⅩ層以下の試掘穴は有機質や木片等を含む泥質土壌（いわゆるターブックワ）であり、また、多量の湧水をみることから、遺物などの投棄のころ当地域は低湿地に接し、堆積したものであることが明らかになった。このことは塩川の低湿地帯がこの付近まで入り込み、北谷城の丘陵部の約半分あまりが西側洋上に突出した状態であることが想定でき、陸路歩行が困難な地勢を形づくっていたことがうかがわれ、南側斜面にいたっても要害の地の利を保持していたことがうかがわれる。

出土遺物については第Ⅵ・Ⅸ層のものと、第Ⅴ層以上の攪乱層や屋敷址などの二時期のものに分けることができる。前者の遺物は青磁・土器・褐釉陶器の順に出土し、その遺物の特徴や組成から、北谷城の丘陵上部出土の遺物と類似しており、15～16世紀のグスク時代の文化期であると思われる。後者のⅤ層以上の上部層の遺物は陶器が主体を示め、しかも、壺屋焼以後の物であることから、壺屋焼の開窯年代である1682年以後の時期のものかと思われる。

第Ⅵ層と第Ⅸ層の遺物の出土状況にはこれといった出土遺物の組成の異差はみられず、ほぼ同じころの堆積かと思われる。蓮弁文をもつ古手の青磁の出土もみられるが、大半は雷文や園内の印花文を施した15～16世紀ごろのものである。

南蛮焼と呼ばれ、青磁と同時ごろの搬入品の褐釉陶器は出土品の2割ほどで、考えられる以上に量的に多く、しかも20cm内外の小形壺から150cmほどの大形の壺

まで多種類の器種の存在が想定できたことは、今回の調査の成果の1つでもある。

類須恵器以外にも内面に青海波文の叩き痕をもつ細片の須恵器が出土したことは管見の知るかぎり、先島や沖縄諸島では数ヶ所の遺跡の報告例しかない数少ない資料である。カムヤキ古窯跡出土の須恵器との関係は今後の課題である。

出土品の中でも特に変形の肩部の中世陶器片はこれまで稲福遺跡や佐敷城での出土例が知られ、赤焼きの陶器と紹介されたもので、今回おおまかな系譜が明らかになったものである。外面には横位に平行叩き目がおこなわれ、内面は丸味のあるあて具を使用したもので、器壁は4.5mmと薄く、素地には黒色や白色の細い鉱物を混入するものである。同種の資料は鹿児島県下には発見例がなく、熊本県下では酸化炎焼成で焼かれる須恵器に類例があり中世陶器と呼ばれていることの所見を熊本県文化課専門員の野田拓治氏からいただき、数少ない資料であるが南西諸島のグスクや古島で類須恵器と判出例があるとの貴重な指摘を熊本大学の白木原和美教授からいただいた。出土例が少なく器形の全容は不明な点が多いが、稲福遺跡、佐敷城の資料からみると頸部がくの字状に縮まり、口縁部が直線的に開くもので、内面や外面の口頸部にかけては叩きの痕跡はなく、外面の頸部から下部にかけて叩きを施す変形のものである。上半部の器形や手法などは叩目の有無を廃除するとグスク土器の変形土器に類似性がみられる。

土器の出土は青磁に次いで出土量であり、中でもフェンサ上層タイプの物が大半を占める。器形の知れるフェンサ上層タイプの口頸部はくの字状に縮まるグループであり、縦形の凸帯の把手をもつグループや滑石混入の土器類のグループの出土例はこれまでのところ北谷城周辺部ではない。時期差なのか地域差なのか、近辺の城の資料をも含めて今後の課題としたい。

後述の川島由次先生の所見にみられるヤギ骨の報告は貴重で、浦添城に次いでのことであり、今後の資料の増加をまちたい。

註)

1. 『北谷城』北谷町教育委員会 1984年
2. 『くすく』沖縄県教育委員会 1983年
3. 『北谷村誌』真栄城兼良 北谷村役場 1961年
4. 『琉球(国由来記)』伊波普猷・東恩納寛淳・横山重 名取書店 1940年
5. 註1に同じ
6. 熊本県教育庁文化課専門員の野田拓治氏の所見と、熊本大学文学部の白木原教授の助言により、今回、分布とその時期が大まかに判断でき、とりあえず、中世陶器の用語を用いることにした。
7. 『饒里恩田遺跡試掘調査報告書』石垣市教育委員会 1982年
8. 『カムヤキ古窯跡群Ⅰ』鹿児島県大高郡伊仙町教育委員会 1985年
9. 『稲福遺跡発掘調査報告書』沖縄県教育委員会 1983年
10. 『佐敷グスク』佐敷村教育委員会 1980年
11. 鹿児島県教育庁文化課専門員の諸氏による。以下註6に同じ。

北谷城跡の獣骨について

川島由次・上田博之・高橋陽子
(琉球大学農学部家畜解剖学・生理学教室)

今回、調査を依頼された獣骨はコンテナ1個分であったが、その内容は想像以上に豊富であった。ウシの頭数は2頭分と思われた。その根拠は表1に示したように、左側の中足骨が2個認められたからである。骨の出土状況はかなり不規則で、たとえばウシの歯は切歯：8本、臼歯：24本計32本よりなるが、今回の場合は臼歯がたったの2本しか出土していなかった。すなわち、ウシの骨や歯は、かなり広く分散して埋没しているものと思われるが、その傾向は以下にのべる他の家畜についても同様のことがいえよう。これらのウシの体格について手持ちの標本と比較した結果、体重は350 kg前後の成獣で雄のものであろうと思われた。今日までの筆者の経験では、グスク時代のウシは今日の黒毛和種よりもかなり小さく雌では200～300 kg程度と思われるからである。

ウマの結果は表2に示したが、ウマも指（趾）骨のうちでも「中節骨」に大・小2個の異なった2型が見られたので2頭分と思われた。小型のものは現存する与那国ウマ（♂）とほぼ同大であるが、大型のものについては標本の数が少ないので詳細は不明である。

イノシシ（表3）は1個体分で、体格は現存の沖縄島産リュウキュウイノシシとほぼ一致した。犬歯が出土していないので性別は不明であった。

ヤギ（表4）は中足骨のみが1本出土していた。グスク時代のヤギ骨の報告はまだないようであるが、筆者は小敷例では浦添城跡出土の獣骨の中でヤギを認めた（印刷中）。ヤギに関する最古の記録は「季朝実録・中世琉球史料」（1477年）であり、15世紀に飼育されたとしても別に矛盾しないことになるが、骨が1本のみ出土という状態であるので、詳細についての言及はさけて、今後の発掘に期待したいと思う。

骨名	右	左
上腕骨	1	1
前腕骨		桡骨 200, 160
		尺骨 1
中手骨	1	1
寛骨	1	
大腿骨	1	1
下腿骨		脛骨 1
		腓骨
中足骨		2
踵骨	1	1
臼歯	2	
肋骨	4	

第3表 ウシ出土骨一覧

注) 近: 近位端、遠: 遠位端

骨名	右	左
肩甲骨	1	
前腕骨		桡骨 1
		尺骨
大腿骨		1
下腿骨		脛骨 1
		腓骨
肋骨	5	

第5表 イノシシ出土骨一覧

骨名	右	左
肩甲骨		1
上腕骨	2	2
前腕骨		桡骨 1
		尺骨 1
中手骨	1	1
指(趾)骨		基節骨 1
		中節骨 2 (大・小)
		末節骨 1
大腿骨	1	3 (破片)
下腿骨		脛骨 2
		腓骨 3 (破片)
中足骨		3 (破片)
距骨	1	1
前頸骨	1	
胸椎	1	
臼歯	3	
切歯	2	
下顎	1	
肋骨	4	

第4表 ウマ出土骨一覧

骨名	右	左
中足骨	1	

第6表 ヤギ出土骨一覧



1944年(昭和19年)ごろの北谷町



上 北谷城遺景 (東より、手前鉄塔より3番目が発掘地)

下 北谷城遺景 (南より、中央部鉄塔よりやや右手)

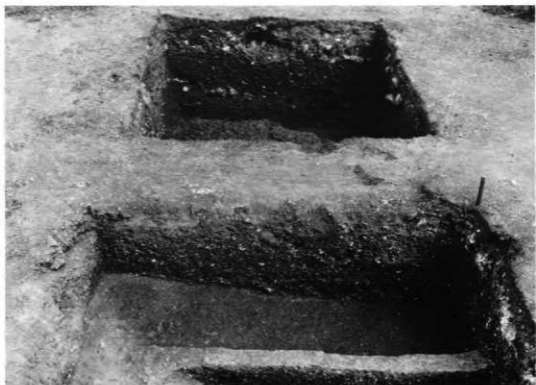


上 発掘調査区 (南東より)

下 発掘調査区 (南より)



上 発掘調査区 (南より) 下 発掘調査区 (東より)



上 発掘調査状況 下 発掘調査状況



上 N地区グリット内状況

下 N地区グリット西壁断面図



上 S地区グリット内状況

下 S地区グリット東壁断面図



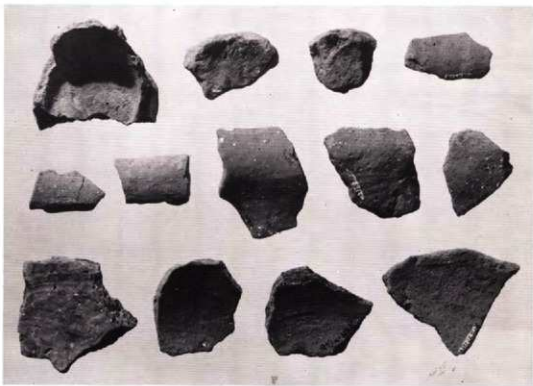
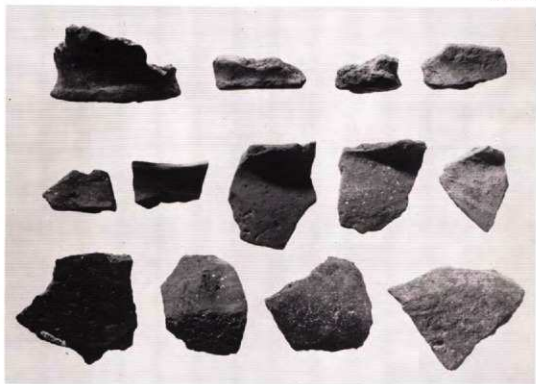
上 S地区グリット北壁断面図

下 S地区グリット内遺物出土状況



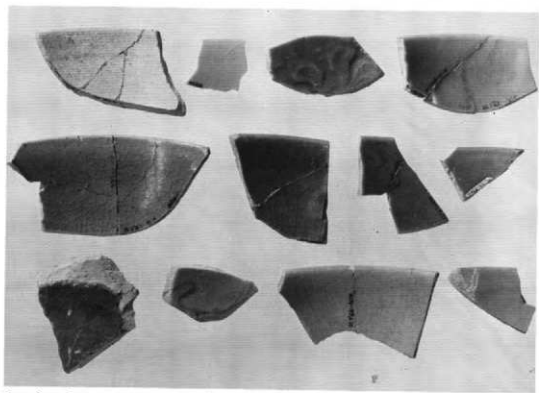
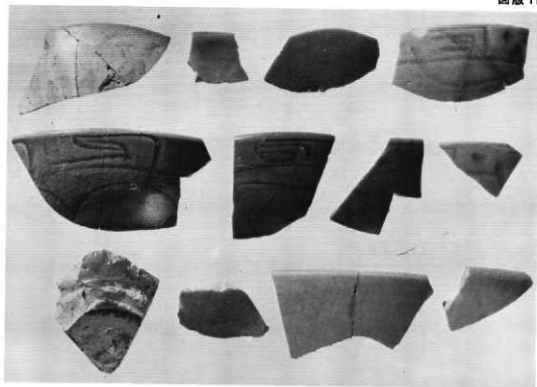
上 S地区グリット西半分試掘状況

下 S地区グリット試掘穴土壌状況



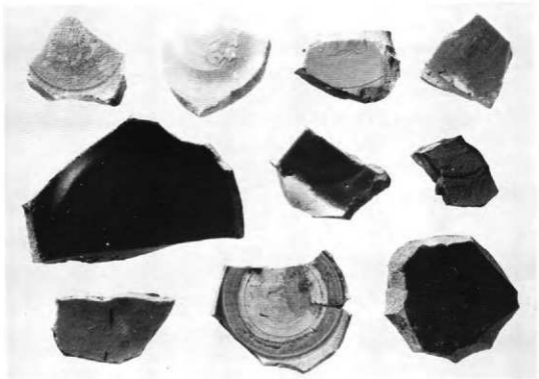
上 出土器外器面

下 出土器内器面



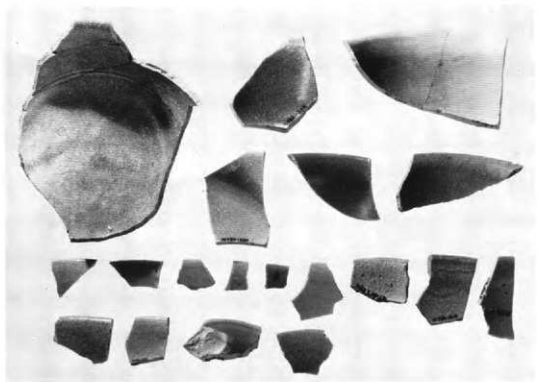
上 出土青磁外器面

下 出土青磁内器面



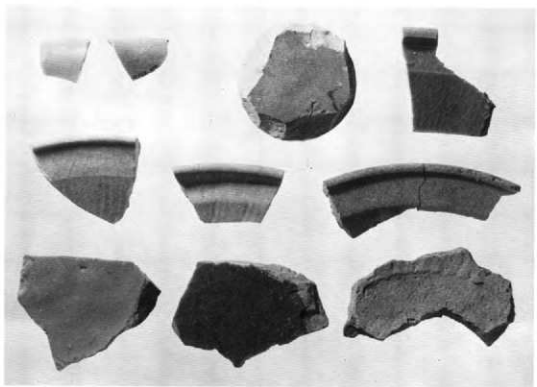
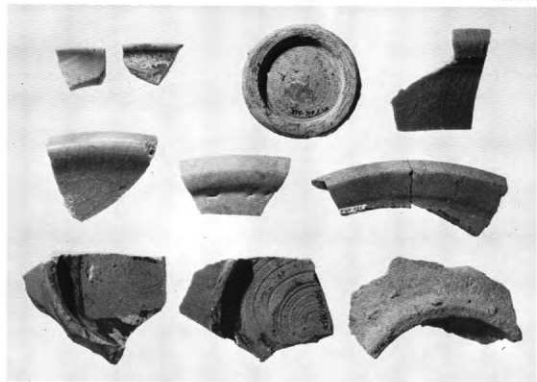
上 出土青磁內器面

下 出土青磁外器面



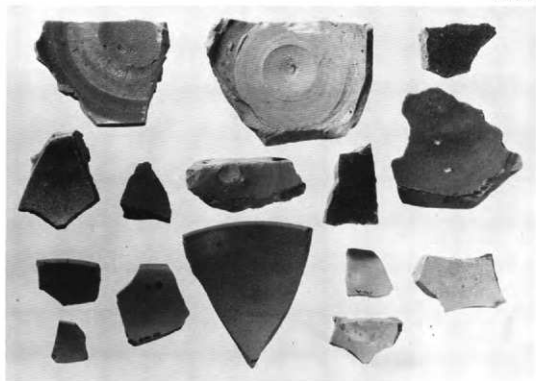
上 出土青磁内器面

下 出土青磁外器面



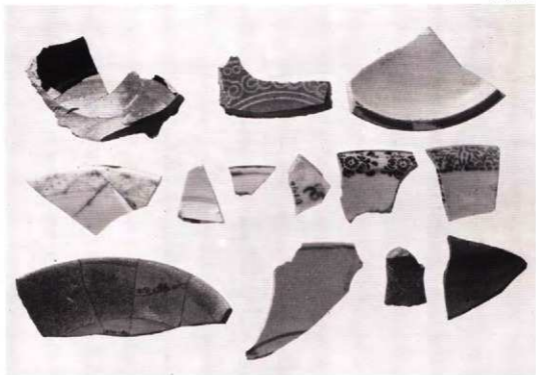
上 出土青磁外器面

下 出土青磁内器面



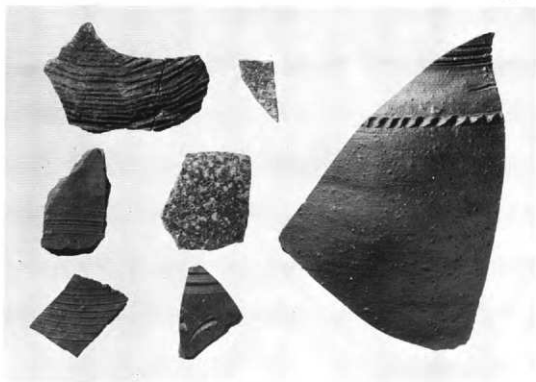
上 出土青磁・白磁内器面

下 出土青磁・白磁外器面

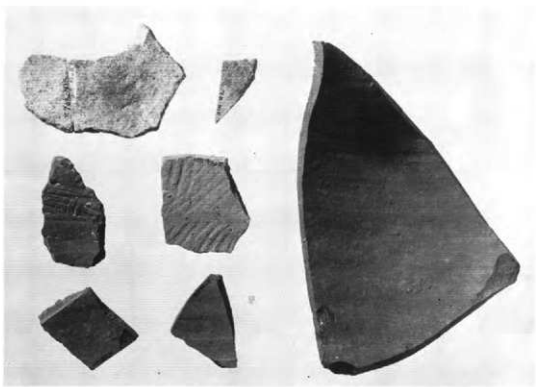


上 出土天目·高麗青磁·染付·陶器内器面

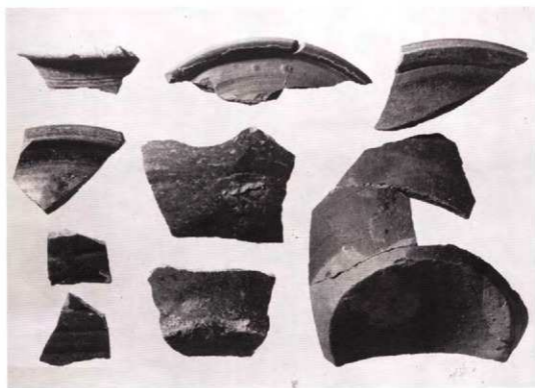
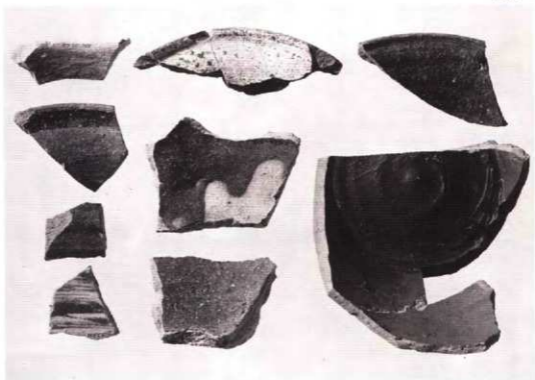
下 出土天目·高麗青磁·染付·陶器外器面



上 出土中世陶器・須惠器・陶器外器面



下 出土中世陶器・須惠器・陶器内器面



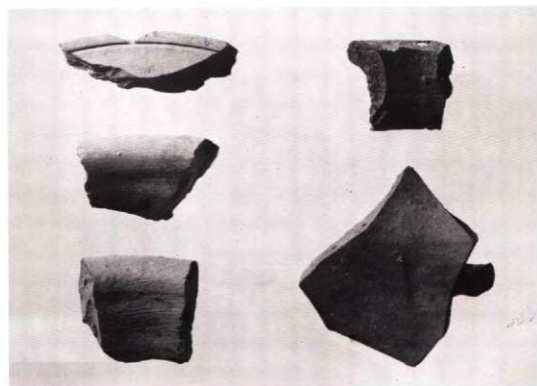
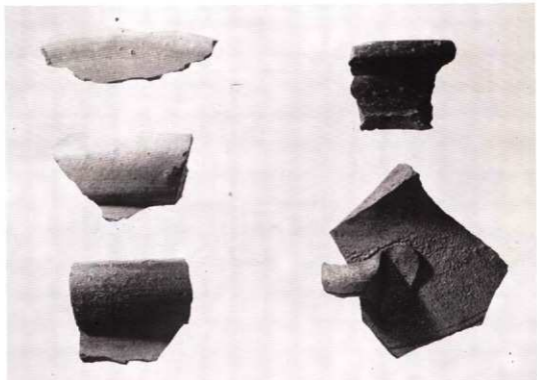
上 出土陶器内器面

下 出土陶器外器面

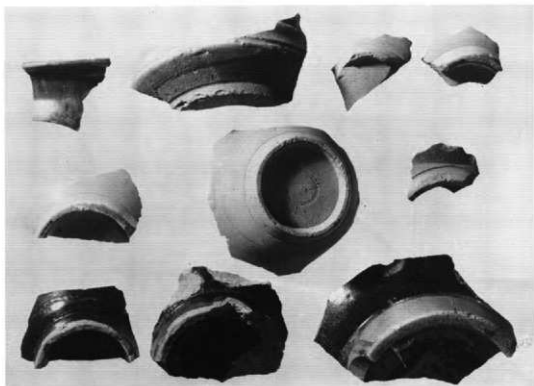
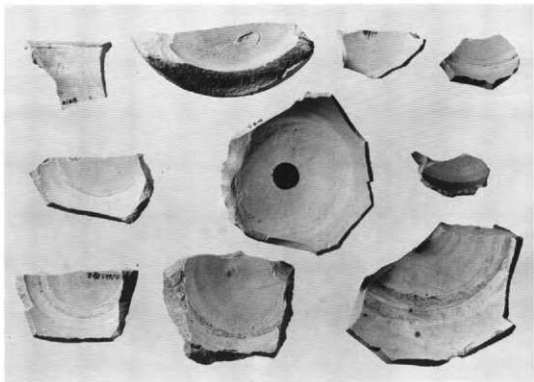


上 出土攪鉢・陶器內器面

下 出土攪鉢・陶器外器面

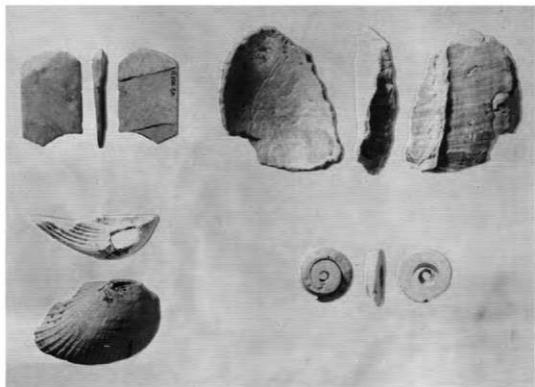
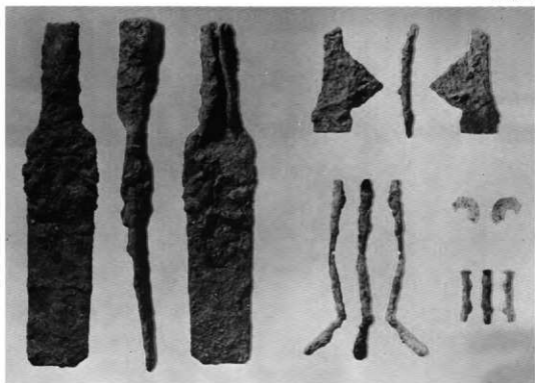


上 出土陶器外器面 下 出土陶器内器面



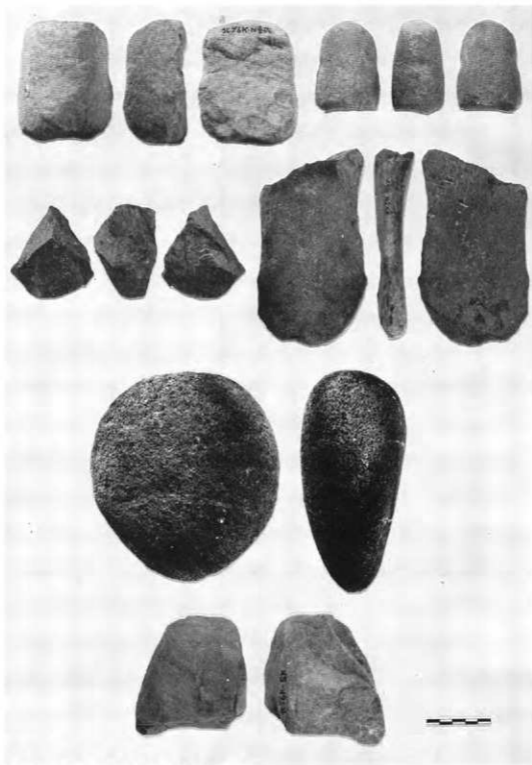
上 出土陶器内器面

下 出土陶器外器面

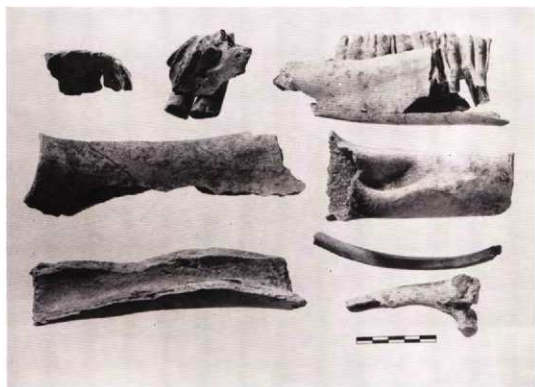
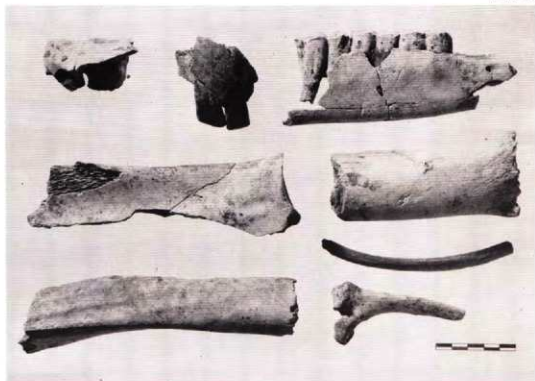


上 出土鉄製品・鉄貨

下 出土石製品・貝製品

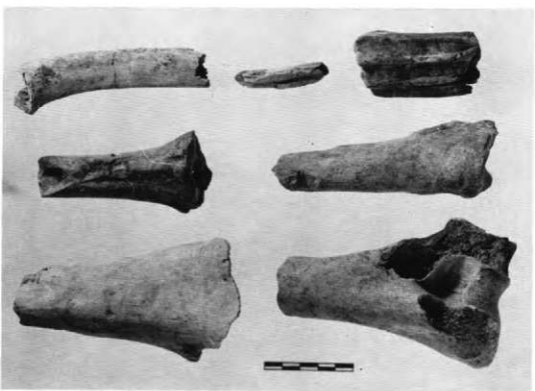
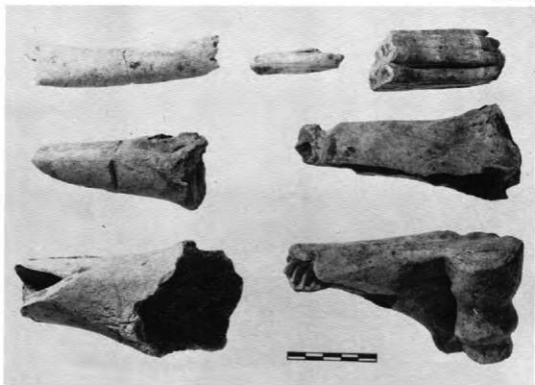


出土凹石・敲石・スリ石・打ち欠き石器



上 出土ウマ骨表面

下 出土ウマ骨裏面



上 出土ウシ骨表面 下 出土ウシ骨裏面



上 出土イノシシ・ヤギ骨表面

下 出土イノシシ・ヤギ骨裏面

271

北谷町文化財調査報告書第2集

北谷城第7遺跡

— 環慶院幹線移設工事に係る発掘調査 —

発行 北谷町教育委員会
1985年(昭和60年)3月31日
北谷町字桑江592
電話(09893)6-3490
印刷 北谷印刷
北谷町字吉原790-1
電話(09893)6-1068
